

2020年度 須坂市小中学校のあり方検討会議 第4回 会議録（公開用）

日時 令和2年(2020)12月23日 9:30~11:45

場所 須坂市役所第4委員会室

1 開 会（関教育次長）

2 議 事

(1) 委員によるプレゼンテーション

①本多健一委員

テーマ「旧第2通学区高校、数的シミュレーション」

- 全県の高校生は今現在 62,000 人、16 年後には 42,000 人。ちょうど 20,000 人高校生が減少する
- これはクラス数にすると 145 クラス分。須坂高校と同規模の高校が 28 校分無くなる計算
- これは絶対に避けられない
- 須坂市内の高校は旧第3通学区からくる生徒の割合が高く、旧第3通学区の影響を受けやすい
- クラス数が減るという事は、教員の定数が減るという事。すべての教科を揃えることができなければ進学校ではなくなる。地域から進学校が無くなれば、大学に行きたい子の多くが旧第3通学区に流れていく。
- 生徒数＝学校の熱量
- 成長に見合った集団の大きさというものを考慮しつつ、真剣に「学ぶ場のあり方」を考えるのがわれわれ大人の責任
- 15年後の高校生にどういう教育の場を提供するのかという事を真剣に考えなければいけないし、そこまでにいたる小学校のあり方や中学校のあり方のことも、この将来図を念頭に置きながら考えるべきだと思う

②近藤伸作委員

テーマ「インターネット・SNSをより良く利用するために」

- 子どもたちのSNSの利用は学校にとっても課題
- 単に利用を規制するのではなく、これから社会で生きる子供たちが、SNSに関してより良い利用者になって欲しいと考えながらこのテーマを設けた

- 情報モラル教育講演会には親子で参加して同じ話を聞いた。スマホの影響や、使用ルールの重要性について、親子で共有することができた
- 常盤祭で行った意見交換会では、中学生の SNS 利用について、禁止すべきか、禁止すべきではないか、両方の意見発表があり、PTA からも参加した。
- PTA からは、SNS ルールは子どもたち自身が考えたことなので、使用する子どもたちがもう一度真剣に考える必要がある。親は後ろから子どもを支えながら、子どもたちがどういう風に考えるんだというところを、もう少し前面に出したいという意見があった
- 保護者の意見を聞いた生徒からも再度意見があり、今は結論を出すことはできないけれど、話し合っていく事はこれからも利用するにあたって大切だと思えたので、これからもしっかり考えていきたいと子どもたちがまとめた
- 家庭の中でのルール作りを依頼した。より良い利用者になるために、親子、家族で一緒に考え、話し合うことをお願いした
- SNS 利用に関して、全てが悪いではなく、自主性を持たせながら使うということを保護者としてしっかり認識することができた
- G I G A スクール構想に対する期待は大きいですが、子どもたちの健康への悪影響や、想像力の低下を心配する声も出ている
- 保護者も一緒に、端末の適切な使用方法を学び、健康や心身に影響を及ぼす可能性を認識し、責任をもって管理する必要がある

③勝山幸則委員

テーマ「ポストコロナを踏まえた縦と横の連携」

- 幼稚園・保育園と小中学校及び高校までのつながりを縦の連携、そして学校と家庭、社会とのつながりを横の連携として、開かれた学習環境を作る
- 小中学校で取り組むテーマを「新しい形の学びの創造」「小中連携教育の推進」「不登校支援」「特別支援教育の推進」の4つにまとめた
- 「新しい形の学びの創造」のキーワードは「学びの空間を広げる」「学び方を変える」
- 課題は「開かれた教育課程」と「子どもが自律的に学ぶ方法への転換」
- 目標として、数値で表せない生きる力の評価がとても重要だと考える
- 方策として、学習の個別化は指導の個別化で可能になると考える
- 学びの空間を広げる有効な手段の中に ICT があると位置付けた
- ICT の活用については各校で差が生じないように、ICT の情報や指導法の共有が重要。
- ICT 教育の研究は学校では難しい。大学との共同研究は有効

- リアル体験は外せない。
- 「小中連携教育」のポイントは「共に育つための情報共有」
- 「学習の個別化」「指導の個別化」「協働学習」をどう強化していくか、数値に表せないその子の強みをどう評価していくかを情報交換
- 小中連携を図ることで中一ギャップや不登校減少にもつながることが期待できる
- 東中学校校区では、小中一貫教育又は一貫校等の検討も考えていく時期
- 「不登校支援」のポイントは「離れていても同じ空間」
- 学校に来られない児童生徒は、欠席することの不利をこれまで甘受してきた
- 学習環境の変化は不登校の子達への支援の明るい糸口になる
- 家庭や学校以外の施設も活用し、育ちを評価していく
- 家庭学習について保護者を支援することで家庭との横の連携ができる
- 不登校支援の方に支援方法を共有いただければメンタルの支援にもつながる
- 「特別支援教育」のポイントは「発達障がいのある子どもの実態に合った支援」
- 大事なものは、先生が困っているのではなくて子どもが困っているのだと主語を変えること。教師の見方の意識改革
- そのためにも、合理的配慮がなぜ必要なのか、発達障害に悩む子どもの困り感等の基礎的な知識を全教員が持つべき
- 須坂市には須坂支援学校や通級指導教室に専門性の高い先生方がいるので、その良さを最大限に活用して、特別支援教育コーディネータを支援
- 「幼稚園・保育園と小学校の連携」のポイントは「その子の強み」といったよりプラスの情報が、違いを活かす教育に結び付く。
- 「中学校と高等学校の連携」では、中学校での観念的な進路選択の、その先にあるものを体験していく。まちづくりやボランティアを学びながら体験することで主体的な進路選択に結び付いていく

④山岸洋子委員

テーマ「続・未来の教室～改革のヒント～」

- キーワードは「つなぐ須坂 世界が知っている須坂」。縦糸は未来に、横糸は世界に
- 柱は2つ。柱1は「自ら学ぶ力」。柱2は「開かれた学校」。そしてその基盤に「学校改革と働き方改革」がある

柱1「自ら学ぶ力」

- 30年以上前に、今日のタイトル「未来の教室 CAI(コンピューター支援教育)」に出会った

- 当時のキーワードは「子どもが変わる」「先生が変わる」
 - 子どもたちはつまずきながらも自らの考えで学びの疑問を解いていく
 - それ以上に変わったのが教師自身。一斉授業では気づかなかった一人ひとりのつまずきが発見できた
 - ある中学校で CAI 教育の理念「一人ひとり」「自ら」を基に、数学マラソンを始めしてみた
 - 1日4問で、○は付けるけれども×は付けない。子どもたちの考え方を大切にしたいという考えからだった
 - 子どもは適当に答えて間違えるのではない。子どもは正しく間違える。誤答にはその子なりの論理がある。子どもたちはどうしてそう考えたかという事に意識が大きく向いてきた
 - CAI 学習の理念を理科と英語にも発展させた(3教科3コースの中から自由選択する学習、自分のペースで学習するというもの)
 - 自ら学ぶ習慣が付いた子供たちは、週末の確認テストも楽しみに臨むようになり次への意欲につながった
 - 教師の意識改革、指導→支援、全職員の連携、これが「やらされる学習」から「自ら学ぶ学習」へ移っていくものだと実感
 - 福井県の学校を訪問した時に「この学校の魅力は何？」と聞くと「授業が分かることです」と即答された。
 - 福井県の先生方と話をする中で、「学校を越えた意識改革」と「連携」という言葉が印象に残った。
 - お互いに良いところ取りをする。こんなことが子どもたちを支えていたのだと思う
 - 自ら学ぶ子どもたちを支えるヒントはたくさんあることに気づいた
- 柱2「開かれた学校」
- 小規模校を語る時に「○○ができない」ということが多い。この語りの中では夢も発想も生まれにくい
 - 学校が箱であるという発想を転換。箱から飛び出して活動してみれば、自信が勇氣となり、自己肯定感が自己有用感につながる活動ができる
 - このエネルギーは学力にも大きな成長をもたらす
 - この発信力は、世界につながることもそんなに難しいことではないと感じた
 - 意識の改革が、子どもたちを長いスパンで見るとということや、地域との一体化につながってくる、という感想を持った
 - 海外に行ったときに、ノルウェーや中国の中学生から、日本で起きていることを自分事として捉え、それに関する質問をもらった

- 彼らは己と世界を見ていると実感した。
- 世界を見るとか、自分を表現するとかを考えると、日常生活の中でもっと子ども達に任せるべきことが山ほどあるように思える
- 須坂を足場にして、中と中、外から中、中から外へ、いろいろなつながり方があるように思う。
- 夢や願いに眼を広げたとき、世界に眼を向けながら、自分の生き方と対峙できる、そんな子どもたちであって欲しいと願う

学校改革・働き方改革

- 30年前にCAI教育に出会ってから、その理念は、教壇に立つ上での基盤となってきた
- パソコンを持てるようになって先生方の環境は確かに変わったが、子どもを引き出す、支えるとか、後押しする環境になったとはまだ言えない
- 数多い会議の改革
- GIGAスクールに向けた
「子どもたちのICT改革」 校内のどこでも、生徒全員が同時にネットワークに接続できるなど…
「教師のICT環境整備」 校外とやりとりできる個人のメールアドレス、出張先で資料確認できるネットワーク環境、機器利用の研修やヘルプデスクなど…
- 改革は足元にある。やれることからやってみる。やってみることに価値がある。やれば効果や課題が見えてくる。まず一歩から
- 教師のオンライン研修や会議・ホームページでの情報共有など…
- チェンジすることにチャレンジする思いは必ず子どもたちに響く、繋がると実感した。正に今がそのチャンスではないか
- 小さなアイデアや小さなチャレンジは、学びの種まきだと思う
- ICTの活用が、一人ひとりの自立、環境にしっかり目が向けられている以上、川のささやきや風の色を感じ取る子どもたちに育つものと信じている

⑤久保田博委員

テーマ「地域と学校」

- そもそも学校は、地域と共にあった。
- 教育界では「生きる力」が求められ、「学校、地域、家庭の協力」がことさら強調されるようになった。
- 学校では、地域の人的・物的資源を含めた教育力の導入を試みた
- 地域の人々は自らの生涯学習の一環として、また生きがいとして学校に関わるようになった

- 学校は地域と目標を共有するために周知することと、周知度を第三者評価で検証することが必要である
- 地域と学校が共に主体性を持つことによって、共にメリットを得る。例えば地域が学校で行った読み聞かせ活動が、その後児童が保育園で読み聞かせを行うなど、学校から地域に返っていった。
- 地域の高齢化や担い手不足は、読み聞かせ活動等にも影響が及ぶ。学校の課題は地域の課題であり、地域の課題は学校の課題であることを共有すべき
- 市内にはあらゆる所に教材と成り得る歴史的・文化的資源が豊富。まるごと博物館の取り組みも活用したい
- 学校づくりは地域づくり。未来の地域の創り手となる子どもたちに、ふるさと教育という投資をしたい
- 地域公民館と学校が未来の地域づくりの拠点となる
- 「どうなるか」ではなく、「どうしよう」というスタンスで新しい日常を創り出していきたい
- 教育会では「不易流行」という言葉を大事にしている。本質的なものを大事にする中に、新しい変化を取り入れていくという解釈。正に今がそのとき
- 新しいものを取り入れていくときは、新しい組織を増やすのではなく、今ある組織を見直して、それを活用していく
- 究極の連携・協力は、学校、地域、家庭がそれぞれの役割や責任をもって果たすこと

⑥月岡英明委員

テーマ「小中学校ESD連携」

- 世界に眼を向けると同時に、身近な課題に目を向け、それを解決する力を付けていく。課題をとらえ、それを主体的に解決する方法について具体的に行動に移してみる。その過程で、主体的、対話的、協働的な学びが生まれる。
- そういった学びを通して、魅力と誇りある須坂市を創造していく力を育むことが目標
- これを大前提として、どういったカリキュラムを仕組んでいけばいいのかというところの具体的な連携モデルを構想してみた
- 総合的な学習の時間を中核に据えるが、教科横断的に、いろんな教科・領域が連携しながら教育活動を行い、ESDの目標に向かっていくもの
- 須坂だけに視点をあてたのでは世界に目を向けることができないので、環境や平和、食、教育の問題等を通してSDGsとの関りを考えながらやっていく
- ESD連携モデルは、各校で独自に取り組んできたものをある程度統合して、連携

しやすくするためのモデルになっている

- SDGsは喫緊の課題であるが、第1の目標とはせず、SDGsとどう関わるのかとか、SDGsの視点からとらえた時に自分たちがやろうとしていることが世界的な課題とどうつながるのか、というような新しい視点をESDに与えてくれるものだと思う。
- SDGsをやる事が最終目標ではなく、あくまでも目標は須崎市ESDである。
- 学習したことをアウトプットするという体験は非常に学びを深めてくれる
- 情報を収集し整理・分析するという活動だけではなく、それを発信していく、あるいは行動に移していくという体験が、子どもたちの学びを深めてくれる

(2) 意見交換

伏木座長：

- 今日の発表を大まかに項目立ててみた。

①少子人口減少社会に対する対応

シビアに、実際にどうなるのか、責任をもって検討する必要がある

学校の形が「統廃合」「小中一貫校」「中等教育学校」あるいは「保幼少中高連携」の形とか、学校を越えたいろいろな社会教育機関との協同とか、いろんなことを含めて、人口減少に対して、現実には予算の限られたパイを分け合うわけだから、この問題を整理してきちんと冷静に考えていかなければいけない。

②教育の内容

これまでの学校教育がこのまま続いていく事がいいのかということが訴えられた。SDGsとか須坂ESDという枠とともに、「ふるさと学習」をどう考えていくか。これまでの学力や知識を身に付けてきた教育の内容に、何か足りないものがあったのではないか、子どもたちが自ら学んでいくような教育が必要ではないか、という教育の中身に関する提言があった

③教育の方法

GIGAスクール構想により、教育がデジタル化していく。先進国の中では遅れているデジタル状況の中で、国がこんなに予算を付けることは、今後何十年間は無いと思う。ここでやらないと、子どもたちを何十年も遅らせてしまうことになる。そんな局面にきている。今後のタブレットの更新の際にも、各家庭皆に同じ環境を保障していくために何を検討しなくてはいけないのか。様々な教材を全員に買わせる必要があるのか等、もっと学校の資源を有効に活用する手立てを考えなくてはいけない。ソフト、ハード含めて、教育の方法について、少し見直していく必要があるだろうというようなことが出てきたと思う

島田委員：

- 近藤委員の発表に関して、中学生の生徒会サミットで SNS の統一ルールを作っている。改訂の方法を探っていくところだが、規制をしていくことの意味、そして方向性をしっかり考える必要がある
- 小学校、またその前の段階から、自律した使い手となっていくために、自分たちはどう枠組みを考えていくのか、子どもたちの主体的な考えで作っていく視点に立つ必要があると感じている
- 一人一台端末で学んでいく時のルールについても、そこと大きく連動してくる。子どもと家庭と共に考えていくという視点が必要

伏木座長：

- 大学関係者の間で言われているのは、問題はパソコンやタブレットではなく、画面サイズの小さな携帯端末に依存することであり、健康上の注意点もあるということ。
- むしろ日本の子どもたちはキーボードを打つ速さが遅い。手書きの方が早いので使うメリットを感じていない。もっと早くキーボードを打てるようにならないと意味がない。社会で仕事をするようになるとそういう仕事が多くなる。

本多委員：

- ICT の活用はどんどん進めている。高校生は ICT が使えないと、多様な教育活動ができないような状況になっている。
- ただ、学校間格差や家庭の状況で、できる生徒とできない生徒が生まれてしまうのは良くないと感じている。
- 先生方は何度も研修をし、オンラインにきちんと対応できるように、たくさんの時間が必要だった。今年それができた一番の理由は部活動がなくなったこと。
- クラブ活動が無くなって、土日の大会が無くなったことで、先生たちは休むことができたし、授業にちゃんと向かい合うことができたし、ICT の研究もできた。
- 部活動が元の状況に戻ったときのことを懸念している。
- 働き方改革をきちんとやらないと、ちゃんと生徒に向き合えない。生徒に向き合うという事が我々の最大の仕事。
- 余裕をもって向き合えないとか、いい授業を作ることができないという状況は、ちゃんと考えていかなければいけない。
- 児童生徒に、確かな学力とか、分るワクワク感とか、そういうものを与えたいと思う。そのためには授業研究をちゃんとやらなくてはいけないし、ICT を活用し

て有効な授業を作っていかなければいけない

- 先生達にはちゃんと研究する時間と、体も心も休める時間が必要。それは全て生徒のため。
- 他の地域とは合わなくても、須坂だけはそういう風にやっていくという意気込みも大事になってくるのではないかと思う

勝山委員：

- 働き方改革はいつも頭にあるが、これって、できるのかなという気持ちもある
- 学校は教育課程がピッタリで、もちろん変えていかななくてはならないが、その労力は相当だと思う
- ICTに関しては、先生方が教材開発とかに関わる必要は無いような気がする。
- ICT教材をどう使うかは教員がやるべきことなので、使い方の工夫はしてもいいと思う。ICTが無くても授業はできる。でも、ICTを使えばさらに良くなるということ。
- ICT活用の委員会を作ったりすると、教員はこういう教材を作った方がいいとかになりがちだが、そうではなくて、使い方を考えるうえでの検討ならいいが、そうではない部分にまで行ってしまうと、働き方改革の中では本末転倒
- その辺のところを先生方が理解して、どこがイニシアチブをとって進めていくかということも、十分配慮しなければいけないと思う。

伏木座長：

- 県教委も須坂高校の取り組みに大変注目している
- これだけ進んでいる県立高校はそんなに多くないが、これができた理由として、コロナで部活動が制限されたというのがとても大きな要素
- 先進国で、学校の先生が夕方や休日まで部活動を担当する国は他に無いので、教員にとってすごく負担になっているという事実がある
- ある意味、私たちがこれまで当たり前だと思ってきたことを、今回のコロナによって見直すタイミングになったのかもしれない
- 学校も子どもたちのために良かれと思って、〇〇コンクールというものが沢山設けられ、そのために夏休みの宿題がいっぱいあって、先生たちがその展示や委員会にかり出されて、本当に必要なのかという事を、少し問い直してみる
- 子どもが主体的に、どこまで自分たちができるのかという問いを持って、例えばSDGsに子どもたちが自ら関わるといような行動にはなかなかいかなかった。
- 高山村では中学生が生徒会で決めたことを毎年議会で要求して、それを三役がちゃんと聞いて村の行政に反映できるということを以前からやっている。

- フィンランドで取り組まれているアントレプレナー教育が参考になる。日本では「起業家精神」と訳されるので、キャリア教育か大人の話だと思う人が多いがフィンランドでは保育園からやっている。自分は社会に参加できる、私は社会を変えられる、というマインドを起こすのがアントレプレナー教育。
- コロナ禍でも、フィンランドの首相は子ども記者と対話することを毎日のようにやった
- 子どもを子ども扱いしないで、社会の一員としてみなしている。だからフィンランドには「社会人」という言葉が無い
- 私たちは、子どもを未熟な存在として保護する対象にしすぎてきて、お膳立てをしてルールを敷いて私たちが制度設計をしすぎたのかもしれない。
- それでは対応できない時代になっているのかもしれない。
- 例えば、もっと中高生が自分たちの公民館だと受け止めて主体的に公民館の改革に発言できるような雰囲気づくりは、学校教育でももう少しやるべきだったと思う
- 須坂 ESD や SDGs が一つの指標となって、教育方法に関して「ふるさと学習」をどう一緒に考えていくのかは、各委員からの話を参考に整理したい。インターネット上のツールを活かせば、いろんな世界と同時に繋がって考え合える。

山岸委員：

- 勝山委員から話があった、教員は道具としてこれを使うという点について、学校現場に先生方のヘルプデスクがあると大きい。道具として使える環境整備が必要

伏木座長：

- 昨日県教育委員会の定例会があった。長野県では高校教育課を中心に学びの改革が進んでいて、「学びの指標」というものが出てきている
- 今までは〇〇大学に何人合格したとかの進学実績で高校の教育評価をしてきた実態があったが、違う観点から、子どもたちが自己肯定感を持って、どういことを頑張るのかみたいなことを指標化して、それを中学・高校・大学と、キャリアとしてつなげていくような発想による指標が昨年度できて、それを現場にどう反映させていくかという議論だった
- もちろん好意的に捉える向きもあるが、現実的には県立の進学系高校では3年生の11月頃から授業をやらずに入試対策をしている。演習問題ばかりになっている。音楽や体育の授業をやっていない。これが現実。何故そうなるのかというと、高校の先生たちをそういう意識にさせてしまう地域や保護者からの圧力が

あるから

- 大人全体が、地域全体が発想を変えていかない限り、今日出てきた議論のような方向にはすんなり行かない
- やはり地域全体が、こういうことに関して、議論できるような、対話できるような場が必要だろうなというようなことを改めて感じた

(3) 提言書の骨組み（案）と提言書のまとめに向けた作業工程について
（事務局より資料に基づき説明）

3 教育長あいさつ

- 本多委員の、成長に見合った集団のあり方があるという話に、非常に共感した。前回保育現場からいただいた、小さい子どもたちの学びの姿から、高校生になるまでの間に、その集団に見合った教育のあり方、集団のあり方があるという事を教えてもらった
- 近藤委員の話の中に、親子で一緒に考えて、最終的には自分たちで決めなさいと親が言ったという話があり、ここだなと思った。それを多くの親が、そういう親の話聞いて、自分もそういう気持ちになればいいんだと思える、その一つ一つの集団作り、親子でやることの意味、しかもそれを学校の中で行うことの意味を教えてもらった
- 勝山委員の話の中で、家庭学習のサポートが大事、特に ICT のガイドは家庭の連携が無くてはできないという話があったが、実は市教委でもこのことを大事にして、改訂版の家庭学習の手引きを来年度から使えるように作っているところ。
- いろんなヒントをいただいたが、中高生の生徒会が連携していくという事や、まちづくりやボランティア体験をもっと具体的にしていっていった方がいいのではないかと話にもヒントがあり、生徒会サミットにも次年度に向けた広がり生まれればいいなと思っている
- 山岸委員の話の中に福井県の小学校の話があったが、私も一緒に行っていて、この学校の魅力はと聞いた時に「授業が分かること」と言った子ども達が目に浮かんでいる。こうなりたいなと思ってやってきているが、本当に大事な言葉だと思った。
- 久保田委員の読み聞かせの話は、非常に印象的だった。地域の方が読み聞かせて、それをまた子どもたちが地域に返していくということ、ふるさと教育を大事にしなければという話、歴史や文化が須坂にはたくさんあるのだからそこを使わなければという話、公民館との連携を含めて、ここは非常に大事

- 月岡委員の ESD の話は、久保田委員の話に直結する非常に大事な話
- このモデルは、各校の先生が一生懸命考えてくれた結果であるので有効に使わせてもらいたい
- 例えば平和学習についても、広島への派遣やカンナと広島結びつきだけでなく、オンラインを使えばいろいろなことが考えられる
- 次回の検討会議で一つのまとめを作ってもらうが、前回、幼児期の遊びが学びなんだという話、それが自己肯定感に結び付いていくんだという話や、今伏木先生から教えていただいた、自己肯定感や自己有用感というものが、これからはとっても大事な、人間を評価していく上での柱なんだというところに結び付いていくとしたら、私たちは幼保、それから小中高といった後期中等教育に向けて、一つの須坂の学びの流れ、こうあって欲しいという姿を作っていかなければいけないと思い始めた。
- 本来の計画では、来年度は地域の人にも入っていただきながら、須坂の小中学校をこれからどうしていこうという具体的な話に入ろうと思っていたが、もう少し、0歳から18歳までの学びをどう見ていくか、その視点をもう少し詰めていかなければならないと思う
- 本年度は一応区切りをつけるが、来年度は新たな形で、18歳までの長いスパンの中で何が必要なのか、もっと具体的にどういうことをしていけばいいのかというようなことを、皆さんにもう少しご意見をいただきながら詰めていく事の方が大事ではないかと思う
- 一人ひとりにタブレットが行き渡り、大きな変革が起こる中で、もう少し議論を深めなければいけない部分があるとしたら、皆さんに次年度も新たな形で願える可能性もあるので、そんな心づもりをしていただいて、ご協力をいただければありがたいと思っている

4 閉 会（関教育次長）